

う ら若い女性二人が、向かい合ひ、針を動かしている。

ふと比べてしまったのは、「ニットカフェ」や「刺繍カフェ」。隣の人と語りながら編み物や刺繍をすることで「リラックス」や「癒し」の効果を得られるという、おしゃれな手芸カフェである。

ああしかし、こゝは、運針にも緻密な正確さを求められる、厳粛な仕事場である。月村美佐江さん、大崎寿子さんを含め、同じアトリエで仕事をする他の若い男性たちも、ひたすら黙々と、針を動かす。眼前の対象のみに向かう集中力が生み出す、この濃密な静けさは、たとえば「上海ガニ」を黙々と食べる人たちを包む静けさに似ているかもしれない。

彼女たちが縫っているのは、紳士服である。

重いコートや上着を片手で持ったうえでの作業など、体力を要する仕事も多いので、女性には難しい分野とされる。それでも、二人は紳士服のテイリングを選んだ。美佐江さんは「祖父父母がテイラーでしたし、機械仕事の多い婦人服をやってみて、これじゃないな」と思っ、やっぱり手で縫う喜びが味わえる紳士服がいい」と。寿子さんは「スーツを見るのも、作るのも好き」が高じて、ロンドンの「カレッジ・オブ・ファッション」

ン」で学んだうえ、さらにサウィル・ロウの老舗「ヘンリー・ブール」で一年間ほど修業した経験もある。

傍目にはあんまり嬉しそうには見えない「カニ食べる人」が実は至福を味わっているように、傍目にはたいへんそうに見えるこの仕事を、実は二人とも、心から楽しんでる。美佐江さんは「喜んで着てもらえた瞬間が何より嬉しい」と、寿子さんは「組み立てていって、思うとおりの形になったときに、ニヤッとしてしまう」。

本場サウィル・ロウでもスーツ姿の男性を数多く目にしてきた寿子さんに、スーツ姿が素敵だなど思う男性は？ とたずねると、こんな答えがかえってきた。「うん……うちの社長がいちばんかっこいいと思います(笑)」。

その社長とは、東京・銀座の高橋洋服店三代目、高橋純さんである。本欄担当K嬢のことは借りれば、「しゃん」とか、「へりん」とか、「へりん」とか、音がしそうな「スーツ」を、素敵に着こなす紳士である。

高橋さんは、注文服を作る職人が少なくなっているという危機的状況と、職人を育てる余裕がない業界の現状（職人一人を育て上げるのに10年という長い時間と莫大な経費がかかる）をなんとかしな

ければと考え、発想を変えて、月謝をもらって仕立て技術を教えるという紳士服縫製教室を開くことにした。3年前のことである。

その第一期生として応募してきた意欲ある若者たちのなかに、美佐江さんと寿子さんがいた。2年間の教育期間を終えて、今は研修生として働きはじめたばかり。いわば見習い期間なので収入も決して多くはないが、好きなこの仕事で一人前になってずっと続けていけたら、と二人は夢見る。

同じく教育期間を終えて研修生として働く「同僚」の斎田くん(28)は、寿子さんと同じくロンドンの「カレッジ・オブ・ファッション」卒業生で、イタリヤの「プリーオーニ」が経営するテイラー養成校にも足を運んだ、熱心な研究家。三浦くん(23)と安波くん(27)は専門学校で婦人服作りを学んだが、さらにテイラーの専門技術を身につけたい、と目的をもつ。草間くん(30)はいくつかの職を経たあと「職人になりたい」と、服を作ることがほんとうに好きないまどきの美男ぞういである。

きらきらした目をもつ若い男女が、一心にスーツを作っている。アトリエに閉じ込めておくのもったいない光景ですね、と感想を述べると、高橋さんは「銀座ではなかなか難しいことですが」と前

Who's who

高橋洋服店

テイラー

大崎寿子 28歳

月村美佐江 31歳



置きして、「いつかはオープンキッチン方式にしてみたいとも思っているんですよ」と語ってくれた。

グッドアイデア！ もし実現すれば、イケメン職人に囲まれた美佐江さんと寿子さんの仕事ぶりを眺める、というのをもた服を眺める楽しみの一つに加わるかもしれない。カニ食いの状態の彼女たちは顧客の視線にはヒクとも心えてくれないでしょうが。■

株式会社 高橋洋服店
〒104-0061 東京都中央区銀座4-3-9
タカハシクイーンズハウス3F
TEL:03-3561-0505 FAX:03-3561-0390

中野香織=文
text:Kaori Nakano
福知彰子=写真
photographer: Akiko Fukuchi



アトリエは、本店からすこし離れた銀座1丁目にある。使い込んだ指ぬきはふたりのもので、手前は月村さん(左)使用の日本製、奥の台形のものは大崎さん(右)使用の英国製だ。先輩が残していった針山を大切に使い、テイラーの仕事にはげむ。高橋洋服店の技術と伝統はしっかりと後輩に受け継がれていく。